

歸莊における看花への執念

—「尋花日記」制作の経緯—

合 山 究

漢民族の明朝が異民族の清に滅ぼされた明清鼎革の戦亂は、この時代に成人した文人たちの人生に、ひとしく決定的な影響を及ぼした。

とくに清朝が薙髮令という、當時の漢人にとっては屈辱的な一種の踏み繪を課したために、士大夫はみな抜きさしならぬぎりぎりの立場に追いこまれ、それぞれにおのが生存と志操とをかけて、自分の人生を選び取り、時代の荒波に必死に對處しなければならなかった。平穩な時代ならば、曖昧模糊とした形でしか現われない、それぞれの人となりの根源が、ぎりぎりの地點に立たされて、はじめて鮮明にあらわれてくるのである。時勢の波に乗って強者に付く者、それに抗がい殉節の生涯を遂げる者、苦惱の果に貳臣となる者、戦亂を避けてひそみ隠れる者、あるいはそれらが複雑に入りまじった人生を送る者など、いろいろな生き方があるが、危急存亡の瀬戸際に立たされて、いかなる人生を選び取るかは、その人の人間性と思想とを大きく左右することはいうまでもない。

狂瀾怒濤のこうした騷擾のただ中に生きた歸莊（一名祚明、字玄恭、號恆軒など）（一六一三—一七三三）は、時運に立ち向って生きる人生を選び、

異民族たる清の中國支配に抵抗し、明の滅亡後は、前朝の遺民として、三十年に及ぶ守節の生涯を貫きとおした。それによって彼は通常、愛國の文人として評價されており、それはそれとして妥當なものであるが、その一面彼が明末清初期における有数の花の文學者であり、また獨特の相貌をもった花の觀賞者であったことについては、まだ十分な認識と考察がなされていないかのように思う。

しかしながら、彼には「尋花日記」二卷という、花を尋ねる五篇の隨筆から成る、哀愁とリリズムにみちた麗わしい散文集がある。それは「日記」というよりも、むしろ一種の「遊記」（紀行文）であるが、それによって彼は、明末清初の代表的な小品作家の一人に數えられている。さらにその上、「看花雜詠」一巻という詠花詩集があり、また「落花詩」の連作十六首もある。現存する彼の作品（歸莊集）十卷、（恆軒詩集十二卷、懸弓集三十卷、恆軒文集十二卷）の果して何分の一に當るかわからないが、もしそれらの詩文集がそのままの形で残っていたならば、花に關する作品はさらにその數を加えたことであろう。

だが私はここでこれらの作品の文學的價値の品隨をしようとするのではなく、「愛國思想と民族の氣節にみちみちた詩歌」を作り、願炎

武と并稱されて「歸奇願怪」と目された彼が、どうしてこれほど花に異常な關心を示し、このような作品をたくさん作ったのか。それはただ単に、抗清運動に挫折した者の文人的逃避にすぎなかったのか。それともまたほかに何か、彼を花に向かわせる抜きさしならぬ要因があったのか。そのようなことについて考えてみたいと思うのである。政治的で英雄的な「愛國」の行爲と、個人的で情緒的な「愛花」の心情とが、彼においてどのような結びつき方をしているのかを探ることは、興味あることであるが、それは単に歸莊個人についての興味だけではなく、それを明らかにすることによって、明清鼎革期に遺民として生きた知識人の心情の一端をも、窺知することができるのではないかと思うからである。

二

さてそれでは、歸莊が花に對して強い關心を持ちはじめたのは、いつごろからであろうか。彼が「尋花日記」の最初の作品「洞庭山看梅花記」を作ったのは、順治十七年（一六六〇）の正月、四十八歳のときであるが、大體このころ、彼は突然花に對して異常に關心を寄せはじめたものようである。この年以後、彼は毎年のように、何度も看花の旅に出かけ、花に關する紀行文を次々にものし、多くの詠花詩を作った。もちろん、彼の年譜（趙經達「歸文恭先生年譜」、又滿樓叢書所收「歸莊集」付録）を見てもわかるように、彼はそれ以前にも遊山や看花に出かけてはいる。しかしそれらは、單なる普通の行樂か、あるいは所用（たとえば抗清活動や鬻文賣畫の仕事など）のついでに花を看るといった程度のものにすぎぬようであり、殆んど作品も残っておらず、四十八歳以後に見られる、全精魂を看花の旅に傾けたような生き方と

は、その燃焼の度合において、格段の差があるように思われる。ではなぜ、この年以後、彼は異常に花に關心を示し、ひっきりなしに看花の旅をくり廣げたのであろうか。その理由を探るのが本稿の主要な目的ではあるが、それについて述べる前に、われわれはまず、「尋花日記」の各作品を中心にして、彼の熱狂的な様相をおびた看花の足跡を一瞥することにしよう。（各篇いずれも長文であるため、ここではただその梗概を述べるに止める。）

(一)「洞庭山看梅花記」——順治十七年（一六六〇）の正月、彼は故郷の崑山を出發して、太湖の中にある洞庭山に看梅に出かけた。ここを選んだのは、玄墓・光福などの世に知られた梅の名所は、遊人車馬でごったがえし、心ゆくまで花を觀賞できないからである。その旅程を追うと、正月八日、崑山から舟出し、翌九日、太湖を渡って洞庭山に至り、路蘇生の家に泊った。しかし梅見にはまだ少々早すぎ、また筆墨の仕事があつたので、元夕（十五日）以後に看花に及ぶこととした。十七日、侯月鷺らと鄭薇令の園で梅を見たが、「園中梅百餘株、一望如雪、芳氣在襟袖、臨池數株、綠萼、玉壘、紅白梅相間、古幹繁花、交映清波、其一株橫偃池中、余酒酣臥其上、願水中花影人影、狂叫浮白、口占二絕句、大醉而歸寓」のである。翌十八日には長折に遊び、道みち梅見をしながら楊灣に至った。十九日には、李灣に遊んだが、梅花はなほだ盛んで、「既登高丘、則山塢湖村二十餘里、瓊林銀海、皆在目中」というがごとくであった。ついで能仁寺に寓し、「自是日、令老僧爲導、策杖尋花、高下深僻、無所不到。……每日任意所之、或一至、或再三」するという工合に、看梅三日の日々を送った。二四日には、路蘇生が迎えにきたので、山陽に出て、二五日、法海寺に至ったが、雨に遇って、曹塢の梅花は看ることができなかった。二六日に

は、翁巷に行つて梅を看、また雨に遇つたので、手ずから蓋おおいを執つて行つた。二月のついでには、鄭薇令の家の梅花がなお绚烂と咲き薫つてゐるといふので、またここに行つて花見をし、大酔して興を盡し、「酒半、酌一卮、環池行、遍醉梅根、且醉且祝、已復大醉、毎種折一枝以歸」つたのである。かくして、半月間にわたる看梅の旅は終つたのであるが、最後に彼はきわめて感傷的な言葉で、次のようにこの看梅記を締めくくつてゐる。「在長圻、遇九年前梅花主人、已不復相識、蓋顏貌之衰可知矣。而世事如故、吾之行藏如故、能無慨然！昨爲薇令述之、薇令曰、『人生逆旅、又當亂世、九年之後、尙得無恙、復來尋花、已爲幸矣！』其言尤可悲也已！復自念惟當亂世、故得偷閒山中耳。半月之樂、勿謂易得也。」

(一)「看牡丹記」——この記が作られたのは、その翌年の順治十八年(二六六一)、四十九歳のときである。實は彼はその前年、すなわち、右の看梅記を書いた年の秋にも、尋花の旅に出かけられなかつた。そこで、この時はたまたま病氣をしたために出かけられなかつた。そこで、この年の春二月に、今度は文墓に看梅に出かけ、十日餘り滞在したあと、虎丘に玉蘭の花を尋ねて歸宅したのであつた。牡丹を尋ねる旅は、その後開始された。すでにこのころ、ひっきりなしに看花の旅をくり廣げていることが窺われる。四月二日、まず昆中の士大夫五家の牡丹を観ることからはじめ、三日には、「尋花於城中、不問路遠近人貴賤、交親疎、有花處即入」、「所過花主人留、皆卻之、恐滯我遊展也」といふふうにして、二十餘里ばかり十一カ所の花を見てまわつた。まるで物にとりつかれたような看花の旅といつてもいいようである。四日には、李光祿、徐翰林の牡丹を觀、五日には微雨ものかは、小舟に乗つて東行し、その日の午後太倉に至り、郁儀臣を訪ね、彼の

案内であちこちの牡丹を看、六日には婁東の吳司成・張給事・王太學らの家の牡丹を賞し、ついで紫藤の花をも尋ねた。この時の看花の心情にも、花があれば、何が何でも見ずにはおかないといふ強い執念が感じられる。たとえば、「過張給事、門者辭以他往。余曰、『看花耳、何必主人』。又辭以無鑰、固強之、許少待。乃先過王太學、太學亦他出、直入其書齋。齋前花百餘朵、甚鮮美、留一詩而出」とか、「將過許嘉興、而與之無交、又聞其拒客、誦得王中翰兄弟方闖入、園門尙閉、乃持一刺、先以看花詩一首、仍託中翰爲介、主人遂出肅客」などといふ有様であつた。七日には嘉定に行つて唐氏の花を看、八日には、天氣が悪く、たえまなく雨が降つたが、「張蓋衝泥而行」き、歸彦容・王公對らの家の花を看た。九日には、張大學の花を看たあと、ひとり舟に乗つて南翔に行き、南翔寺に寓した。十日には、張氏・王氏の花を看たが、多雨のため、はや牡丹も散りはじめ、「將入井之麗華」、「既墜樓之綠珠」のごとき風情であつた。さらに、あちこち花を尋ねようとしたが、どこの園丁も、「三日前猶可觀」とか、「某某家有某某種、今皆衰殘、惜來暮耳」とかいうので、ここに尋花の興も闕き、旅も終りを迎えたのである。そして最後に彼は、「自念去年發此興而不得遂、今既歷三州縣、看遍三十餘家之花、不可謂非樂事！」といい、文末に自ら「逐花狂客」と署名している。わずか十日足らずの間に、三州縣、三十餘家の牡丹の花をあまねく見盡すといふすざまじいばかりの情熱には、いささか常規を越えたものがあり、みずから「逐花狂客」と號したのも、あながち自らにたわむれただけの呼稱ではなかつたであらうと思われる。彼を驅りたてる何物かが心の中に燃えさかつていたのであるからうか。

(二)「尋菊記」——この記が作られたのは、前と同じ順治十八年(二六

六二)の秋のことである。「秋深くして遂に尋菊の興を發し」た彼は、胃痛をも物ともせず、九月十三日、嘉定および南翔鎮への探菊の旅に出發した。この方面に菊が多く、名品珍種のあることは、先の牡丹の旅ですでに知っていたからである。その日彼は、嘉定の外甥陳氏の家にやどり、翌十四日、族弟の家に寓を移し、ここを基點として、十八日まで、十數家の花園に菊を尋ねた。そのうちとくに、陸氏・汪氏には、菊の珍品が多く、古今の菊譜にも無いものが多かったので、これを兩家の菊譜として文中に列擧した。十九日、舟で南翔に至り、三十日まで「尋菊興豪、不遺餘力」というほど、到る處の菊花を見てまわった。その間、花園の所有者たちが苛税に苦しめられるという事件があつたが、彼は「余以無田故、乃得恣意尋花、良爲厚幸」と、本音とも皮肉ともつかぬことをいっている。九月三十日、また嘉定に至り、族弟の家で三日間休息したあと、十月四日から十日まで、また到る處の菊花や天竹を尋ねまわり、十一日の朝、やっと崑山の家に歸りついた。「余今年於花頗有緣、春則玄墓之梅、虎丘之玉蘭、夏則崑山・太湖・嘉定之牡丹、而虞美人・罌粟・薔薇・芍藥・又皆及其繁盛之時、到處追逐。今又逡巡一月、得遍觀嘉定・南翔之菊、而天竹亦其土產、兼得賞玩、亦可謂一時之樂也」といい、ついで最後に、彼の看花がどのような立場でなされるかについて、感懷を述べて締めくくっている。この最後の感懷は彼の尋花の哲學ともいふべきかなり重要な思想を述べたものであるが、後で引用するので、ここにはとりあげない。

四「看寒花記」——これも同じく順治十八年(四九歲)に作られたもので、多十一月、寒花(蠟梅・天竹・晚菊・水仙・山茶など)を、崑山城の内外に尋ね歩いた折の紀行文である。この記もかなりの長文であるため、詳しく述べる紙幅を持たないが、一ヵ月のうちに「水仙五處、蠟

梅四處、天燭八處」、その他數多くの寒花の名所を尋ね歩いた様子が克明に記されている。そして十二月には、この旅で得た花を案上に備えてうち眺め、まったく外出しなかつたという。とにかくこの一年間、休む間もなく、尋花の旅にあげられた彼の行爲は、どう見てもいささか異常な感じがしてならない。

その後しばらく尋花記は残されていない。しかし彼が引き續き看花の旅を續けていたことは、ましがいないようである。たとえば、明けて康熙元年(一六六二)の十月には、菊を尋ねて嘉定に至っている(鄭母七十壽序)、またその翌年の康熙二年には、崑山で梅見をし、「看花雜詠」中の「崑山看梅」詩二十九首その他の詠花詩を作っている(辛卯年應酬詩)所收。次の康熙三年には、鄧尉に梅を尋ねたが、同遊者が早歸したので、風致を盡すに至らなかつたという(觀梅日記)。次の康熙四年には、四月に牡丹を江陰に尋ねたが、案内がなくて、廢然として歸ってきている(看牡丹詩自序)、またその年の仲冬には、友人と花を尋ね、詩を唱和しあっている(經鉅當唱和詩序)。このように、看花への情熱をあくなく持續させたのち、翌年の康熙五年(五四歲)にはまた、尋花日記中の最も長篇で、五千七百餘字にも及ぶ「觀梅日記」を作った。

四「觀梅日記」——鄧尉山に觀梅に行くことを友人と約束したが、みな果さなかつたので、ついに彼は「衣を典して貲となし」、ひとりで行くこととし、康熙五年二月十二日、崑山より舟で出發し、夕方虎丘に至り、梅花樓に寓した。翌十三日には、虎丘の花市を見物し、水仙・菊花をそれぞれ一盆ずつ買い、それを船首において一人旅の寂寥を慰めた。その日、徐枋(一六二二—九四)を訪ねると、莊氏「明書」の筆禍事件で處刑された潘樞章の弟が、名をかえて隠れているのにた

またま出會い、彼は「その兄及びその師(吳炎)を傷み、これが爲に手執つて號慟し」たのであった。ここに歸莊と、反清抵抗運動の同志たちとの深いつながりが窺われる。翌十四日には、光福に至つて人を訪ね、十五日には、花を尋ねて朝玄閣・董墓に至り、あちこちに梅花を嘆賞した。その後の彼の足どりについては、餘りに長文のため、その詳細については割愛するが、茶山・玄墓・靈巖・光福寺・潭東・天平・救山・華山などの蘇州一圓の梅の名所を連日尋ね歩き、風景を賞し、詩を作つたことが、こまやかに述べられている。彼が看花にいかにあくなき執念を燃やしていたかは、旅の途中、盲目の王周臣に會つた時、「周臣少余數歲、以雙瞽、今入山、湖山之奇、花卉之艷、已不復能見。如余之年衰於周臣、而猶幸兩目炯炯者、安可不遊山、不看花乎」といつていることから窺うことができる。かくして二月二十八日、虎丘に出て、ふたたび花市を觀、このたびの看梅の旅を終えるのであるが、最後にまた彼は、この旅に關する感懷を述べて、次のようにいつている。「是遊也、花則因梅而及杏・櫻桃・山茶・玉蘭・桃・李。山則自虎丘・鄧尉・玄墓以及天平・華山。其餘小山、不可勝記。所主同遊、往往皆騷客酒人、道流名僧、無一俗士、亦窮愁中一快事也。」

さて、「尋花日記」に含まれている散文は以上の五篇であるが、彼はもう一篇、同じような紀行文の「看桂花記」を残している。これは、右の「觀梅日記」におくれること五年、康熙九年(五八歲)に書かれたものである。この五年の空白の間も、彼の尋花の旅はやはり續いていたようで、たとえば、丁未(康熙六年、一六六七)中秋には無錫に桂を看に出かけているし(看桂花記)、同じくこの年、沈天甫らが「忠義錄」(啓禎兩朝遺詩)に關する文字の獄で殺されたが、彼もその書に序文を

書いていたにもかかわらず、「看花遊山、日日狂醉」していて、難を免れたといつている(卷十雜著、隨筆)。また、「山遊詩序」によれば、康熙八年の秋冬には、蘇州・松江の諸山を探訪している。これらは斷片的記事にすぎないが、その他、この空白の期間に、彼が以前に劣らず熱心に尋花の旅に出つた可能性を示す資料として、「看牡丹詩自序」がある。現在、この牡丹の詩は散佚して傳わらず、ただこの自序を留めるだけであり、その制作時期はしかとは確かめられないが、しかしこの序文中に、辛丑(順治十八年、四九歲)、乙巳(康熙四年、五三歲)に行なつた牡丹の旅のことが見えるので、その制作時期は、どんなに早くとも康熙五年を遡ることはない。それでは、その制作時期は康熙五年以後、いつのことなのか。それは康熙九年の「看桂花記」以後(すなわち康熙十年、五九歲以後)に行なわれたという可能性もないわけではないが、彼の年齢などから見て、どちらかといえば康熙五年から九年の間に行なわれた可能性が強いと思う。今、その一部を引用すると、

凡作事專心志、竭計慮、窮日夜而爲之者、曰不遺餘力、曰惟日不足、若余之尋花是已。……久聞洞庭山牡丹多名種、今年三月、遂不遠百六十里、涉太湖之波濤、二日而到山。結伴尋花、或輿或杖、僻遠之地無不至。有初至不得入者、輒再三往、必得觀而後已。山中名花、大抵皆寓目、多生平所未見者。晝則坐臥花前、夜則沈醉花下、如是數日。興盡則掛帆渡湖、至虎丘觀花市而歸。復徧歷崑山城內外有花之所。峽辰之間、看花五十餘家、殆所至不遺餘力、惟日不足者、其可謂狂且癖矣。

これを見ると、わずか峽辰の間(十二日間)に、五十餘家の牡丹を餘す處なく見てまわるといふ精力的な看花の旅—あたかも花の精に魅

入られた男のうつつなき彷徨を思わせるような直向きな尋花の旅が、依然として續けられていたのである。

かくして、死の三年前の康熙九年（五八歲）に、「看桂花記」が物された。これは「尋花日記」には含まれていないが、現存する尋花紀行の最後の作品である。その年の六月末、杭州の西湖に荷花を觀に出かけた彼は、留滯することこれを久しうしたが、書畫は買れず、旅費は盡き、賃屋舟輿の費も拂えなくなり、「嗟乎！進退維谷、行止難定、遊至於此、亦可悲矣」（五遊西湖記）というほどの困窮にみまわれた。しかし幸い友人に助けられたりして、なんとかこの苦境を脱した。その歸途の八月、嘉興において、はからずも桂花のさかりに出くわし、「余自七月下旬石湖上見桂、八月初旬至嘉禾、越今又二旬、無日不醉花前。蓋名園既多、種復不一、相續發花、故竟一月得坐臥香國也」という楽しい日々を送った。そこで、ここ數年來見てきた各地の桂花のことを思いおこし、この旅でみた桂花とあわせてそれを記し、「看桂花記」としたのである。それには朱貴陽の鶴洲園、曹溶の倦圃をはじめとする多くの名園勝地の桂花の風情がこまかく語られている。

三

以上、やや煩瑣にわたったが、「尋花日記」所收の五篇を中心にして、彼の看花の旅の大體の足跡をたどってきた。いささか冗漫に流れたきらいがあるかもしれないが、それというのも、彼がいかに熱狂的な看花の旅をくり廣げたかを、具體的に陳述したかったからである。それではここで論旨を元に戻して、彼はなぜ、順治十七年（四八歲）のころ突然かかる看花の旅を始める氣になったのか、また、なぜこれほどまでに看花に熱中したのか、という問題について考えてみたい。

すでに見てきたように、彼はその理由について何一つはつきりと語っていない。しかし、これらの作品を虚心に精讀すれば、私たちはその間の彼の心情を、彼がふともらす言葉の中に、かなりはっきりと讀みとることができるのである。そこに私たちは、彼の心の奥底に流れるいいしれぬ亡國の痛みや、やるせなくも抑えがたい憤懣の情のくすぶりを感じないではいられないのである。要するに、亂離亡國という悲劇的外因を除外しては、彼の異様な看花の旅も、悲愁憂憤を底深くたたえた紀行文も考えられないのではあるまいか。このことを更に深く追究するために、ここで私は、彼のおいたちや經歷を簡單ながら探ってみることにする。

歸莊は、明朝の國勢が日増しに衰退に趨く明末萬曆四一年（一六一三）に、江蘇省崑山に生まれた。明の著名な散文家歸有光（一五〇六—七一）の曾孫に當る。しかし、祖父・父ともに、科擧に及第できず、家名は次第に落日に向い、生活もそれほど樂ではなかった。崇禎二年（一六二九）、十七歳のとき復社に入り、そこで同邑同年の顧炎武と親友になった。彼らは復社において名を齊しうし、「歸奇願怪」と目され、明末の腐敗を憤る當時の激しい政論の中で、ともに時局に關心を抱き、憂國の熱情にもえた青年時代を送った。一六四四年三月、彼が三十二歳のとき、流賊の李自成が北京を陥れ、崇禎帝が壯烈凄慘な最後を遂げる甲申の變が起こった。衰退をたどっていたとはいえ、この突然の明王朝の崩壊は、多くの人々にとって驚天動地の大事變であった。これより彼の人生は、動亂の渦中に投げ出され、時代の狂瀾に翻弄されるのである。

翌年（一六四五）の五月、南京陥落。江南のいたるところで激しい抵抗運動が起こった。歸莊もこの年の六月、崑山の人々の雜髮令に反

對する暴動に参加し、これを強行しようとした清側の縣丞の閻茂才をとらえ、白衆殺之、すなわち群衆に告知してこれを殺した。彼自身も詩句の中で、「自斬僞官首、因爲世指名」といっており、彼がこの縣令の首を斬り落したことは、まづ間違いないものと思われる。かくして、七月六日、崑山城が落されると、彼は前事を追及されることを恐れて、髪を斷ち僧侶に身をやつして逃げまどう、亡命逃亡の生活を餘儀なくされることになった。彼自身もその事について、「以城守時爲首難之人、逃竄久之乃免、迨驚魂稍定、欲求所以全身濟世之策」(上吳鹿友閣老書)といっている。その後何年間かの彼の足どりは、あまり定かではないが、やはり先の事件のために一ヵ所に落着けず、郷里の崑山を基點としながら、人をたよってあちこちに寄寓する逃亡生活を續けていたものごとくである。その間、順治十年(一六五三)には、節義の士として知られる萬壽祺(年少)に招かれて淮陰に赴き、子弟の家庭教師になったが、その時彼は顧炎武と連絡をとり、ひそかに兩淮の志士と連携して反清活動を進める準備をしていたふしがみられるという(清詩紀事初編卷二)。しかしその後、清朝の統治基盤が日々に鞏固なものとなってゆくにつれて、南明の抵抗闘争は次第に影をひそめ、また彼の過去の罪科に對する追及の手も、いつしか遠のいていったようである。そこで彼は、郷野に隱居し、文を賣り書畫を鬻ぐ筆耕生活を送りながら、前朝の遺民として生きることにしたのである。

このように彼の經歷は、明清鼎革の動亂と深く結びついているのであるが、それでは彼が、前述のごとく突然尋花の旅を思い立ったとみられる順治十七年のころは、一體どのような時代状況にあったのであろうか。そのころの様子をもう少し詳しく見ることにしよう。順治十七年といえば、世祖順治帝が崩御し、聖祖康熙帝が即位する前年に當

るが、すでにこのころには、明朝の殘存勢力は殆んど自滅に近い形であらかた潰滅していた。わずかにビルマに逃れた桂王朱由榔と、南部沿岸地方の鄭成功がいるにはいたが、その桂王も翌十八年にはビルマで捕えられて、まもなく殺され、臺灣に據った鄭成功もその翌年には死んでしまう。従つて、このころには、復明の望みはもはや完全に絶たれたと、明朝方の者といえども自覺せざるを得ない情勢にあったのである。

歸莊自身が、この時代状況をどのように認識していたかはよくつかめないが、おそらく彼も抵抗運動はもはや絶望的であると觀じたことであろう。あるいはもつと早くにそう思っていたかもしれない。というのは、彼は尋花の旅をはじめるちょうど一年前に、曾祖父(歸有光)の墓地の西偏の小屋を買戻し、これまでの客寓生活を清算し、そこに定住をはかっているからである。そのようなことからみても、彼自身この時期には、すでに天下の大勢が決し、復明の希望は完全に絶たれたと感じていたものと察せられる。

ところで、一切の抵抗運動がもはや空しく、明朝恢復の如何ともしがたいことを悟つたとすると、彼が彼自身に見出したものは、亡國の民として、全てを失なつた惨めな敗殘者の姿でしかないだろう。その彼に残された唯一の生きる道は、前朝の遺民として、あくまでも屈服することを肯ぜずに、精神的抵抗を持續すること、すなわち「天下道なければ則ち隱る」(論語泰伯篇)ことしかないであろう。そこで彼の選んだのが、花に隱れ、花に心を托して、これを尋ね歩くという生き方だったのである。

四

それではなぜ、花を見て歩くということが、彼において清朝への精神的抵抗の形態となりえたのであるうか。これを理解するため、私はまず當時の他の遺民たちの生き方に目を向けてみることにしよう。それを通して見たならば、彼の場合も一層理解しやすいように思うからである。なぜなら、彼の生き方もまた、畢竟、遺民としての一つの生き方であったのだから。

史書に載っている清初の隠士の傳記を読めば、明清鼎革の戦亂がいかにかに色濃くその身上に影を落しているかがわかるが、彼らの大部分は、異民族の王朝の支配をいさぎよしとせず、前朝の遺臣、遺民として生きる道を選んだ人々である。彼らはいわば政治的風壓に抗しかねて、やむなく隠者となることを餘儀なくされた人々であり、この點がとくに、平穩な時代の隠者と異なるところである。従つて、この時代の隠者の生涯は、いわば節義列傳ともいべき側面をもっており、それだけに實にさまざまな劇的な生き方をしている。彼らがどのような生き様をしたかについては、いづれ稿を改めて詳しく論及するつもりであるが、ここには「清史稿」(遺逸傳)より、いくつかの例を引くことにしよう。

それによれば、たとえば清が中國を征服して以後、門を杜^として外界との交わりを絶つた士人に李清(一六〇二〜八三)・李模(?)・郭金臺(一六一〇〜七六)などがあり、農民となつて躬耕自給した者に梁以樟(一六〇八〜六五)・王正中(一五九九〜一六六七)・余增遠(一六〇五〜六九)などがあり、跡を山中に遁^とまして終身城市に入らなかつた者に徐枋(一六二二〜九四)・李天植(一五九一〜一六七二)などがあり、そ

の他、書生を教えて糊口をしのぎ終生時事を語らなかつた者や、髡首僧衣のまま知人を探ねたり名勝まわりをしたりして放浪生活を送つた者など、種々さまざまである。それぞれが、それぞれのやり方で志節を貫いたのである。これらのうち、歸莊の尋花の旅は、最後の山水や故舊を訪ねて放浪生活を送つた者たちの範疇に屬するものといつてよい。たとえば、李世熊(一六〇二〜八六)は、

積壘塊胸中、每放浪山水、以寫其牢騷不平之概。嘗詣西江、交魏禮・魏禮・彭士望諸子、相與泛彭蠡、登廬山絕頂。追維闖賊橫行時事、痛悼如絕、淚下如泉湧、不能禁也。(清史稿遺逸傳)

獨擔瓢笠圖書、徧遊嵩・少・王屋諸名勝。在九山絕粒數日、奇逢挽之夏峯、勸歸老先人墓旁。之燦曰、「某出門時、已誓告先壠不

再返、不能蹈東海、入西山而死、即溝壑道路、無恨也。(同右)

であつたと傳えられている。また、歸莊と關係の深かつた萬壽祺も「髡首被僧衣、自稱明志道人、沙門慧壽、而飲酒食肉如故。時渡江而南、訪知舊、弔故壘」(同右)という生活を送つてゐるし、友人の顧炎武も「異州の賢」を求め旅を頻りに續けてゐる。これらの放浪の旅は、復明抗清の地下運動とも關係があつたかもしれないが、むしろそれ以上に、一敗地にまみれた遺民たちが、故國の山河を訪ねたり、同志と語りあつたりして、節を守り情を遣りながら、精神的抵抗の姿勢を貫ぬくといった色彩が強かつたのではなからうか。歸莊は彼らと同志的交遊があり、ともに遺民としてレジスタンスを續けているのだから、彼らの生き方と深いかかわりがあり、その影響を受けたことはまちがいない。抵抗の一形態としての放浪の旅と、彼の花を求める尋花の旅とは、精神的位相において、何らかの關連があるといえるのでは

ないだらうか。同時代の朱彝尊（一六二九—一七〇九）の「靜志居詩話」によれば、彼もまた「嘗南渡錢塘、北涉江淮、所至遇名山川、憑弔古今、輒大哭、見者驚怪、而公不顧也」といわれるように、放浪の人であった。

ところで、同じ放浪的な旅ではあっても、歸莊の場合は特に、花を求める旅であるというところに、他の人と異なる著しい特徴があるのであるが、それでは花は彼にとって、どのような意味があったのであろうか。花を愛するといっても彼の場合は、ただ単に好きこのみによって愛するということには、餘りにも異常なものがあつたことは、既に述べたとおりである。おそらく何らかの心事を花に托していたと見なければならぬまい。一體に後世では、花を愛する場合、毛際可（一六三三—一七〇八）が「暨後世、不得于時者、遺懷自放、落落無事告語。于是舉一卉一木、玩其香色枝幹之奇、與夫陰晴風露榮落盛衰之變、裴回眷戀不能去、識者未嘗不感其遇而悲其意也」（安序堂文鈔卷七「梅花遶屋圍序」）というように、時世に志を得ない者が、しばしば己が不遇の心事を托してこれを愛するのであるが、ことにこの時代においては、花は單なる花ではなくて、また特別な意味を持っていたのである。それはすなわち、花を節義の象徴として愛するということである。國家の滅亡を悲しんで隱遁した清初の隱士たちは、花を抗清のシンボルとみだてて、亡國の悲愁と孤高の志節とをこれに托し、精神的抵抗をなしたのである。従つて、この時代に生きた隱者の場合、看花の風流にうつつをぬかしているかのように見えるからといって、抵抗の意思を喪失した軟弱な文人的耽美精神のあらわれだとか、敗殘者のデカダンスであるとか、單純に決めつけてしまうのは早計であらう。事實はむしろその逆で、精神的抵抗の一形態として花を愛好している場合が多いの

歸莊における看花への執念

である。その例を示すことにしよう。

さきに小稿「明清時代における愛花者の系譜」で指摘したように、李標や沈天庸は、ともに明朝の崩壞後、「梅花遶屋」して、前明への忠節と清朝への抵抗を表示したのであるが、その他にも、明の崇禎十年の進士で、兵部給事中までなつた謝泰宗（一五九八—一六六六）は、明清鼎革以後、別圃を營み、花藥を蒔え、花の詩を詠んだ。吳梅村の作つた彼の墓誌銘には、

尤其所長菊醉吟者、蓋取以自況也。君性嗜菊、藝數百本於所居之堂、有感於秋風搖落、草木變衰、故託諸露露落英、以寓其君子美人有懷不見之意。固非餽糟醜、自託爲醉吟先生已也。（國朝耆獻類徵初編卷四六九）

という。吳梅村はここで、婉曲的な表現ながら、彼が花に抵抗の意を寓していたことを言おうとしたものと思われる。また、陳士京（一五九五—一六五九）は、魯王や鄭成功と恢復を畫策したが、うまくゆかず、厦門に隱遁して花を種えた。

久之、見海師無功、粵事亦日壞。乃築鹿石山房於鼓浪嶼中、引泉種花、感物賦詩、以自消遣。別署海年漁長。又築生壙、於其旁題曰、遁庵之墓。（同卷四六三）

また、楊湛露（一六〇三—九二）は、

會遭甲申之變、棄諸生、絕意進取、葛巾白布袍、隱居教授。……每踴躍獨行荒野中、遇意有感觸、則慟哭返。歲時拜先墓、必伏地、長號失聲。閒亦蒔菊種花、興至酌酒、清吟以爲樂。（同卷四七八）

その他、張若仲（同卷四七六）・羅聞朝（同卷四六九）・施德裕（同卷四七三）なども、同じような生き方をしている。これらの士大夫はすべて、單に文學的情緒に耽溺して、花を種え詠花詩を作つたのではなく、遺民

としてあくまでも精神的抵抗をなすために、殉節のシンボルである花に心を寄せたのだ。花は明清時代には高潔な隱者の象徴となつたが、わけても清初のこの時期には、節義のシンボルとみなされたのである。

以上のようなわけで、歸莊においても、花は單なる花ではなくて、全人格を傾けて愛するに足る殉節のシンボルであつたのだ。従つて、復明の計が絶望的になつたことが判明してから、彼は突如として、花を看て歩くことに人生の價値を見出したのだと思う。放浪といい、看花といい、ともに明清鼎革期の遺民たちが、その時代特有の生き方として持っていた、抵抗者としての生き方だったのであり、必らずしも歸莊にのみ特殊な生き方ではなかつたのである。ただ彼は、遺民としての生き方を貫きながら、他の隱士と異なつて、その生き方を文學的に結晶させて、「尋花日記」という特異な遊記文學を残したのである。

五

上述してきたように、花が當時節義のシンボルとして希求されていたとしても、歸莊においては、自ら花を植えて看花するのではなく、他人の花を看てまわることに精神を傾けたのは、それにしてもいささか不思議な氣がしてならない。彼は、「余、素より花を愛す」（看牡丹記）、「平生性癖として名花を愛す」（贈種花度）詩、「余、花に於いて愛せざるなし」（尋菊記）などというように、生まれつき花好きの性質が強かつたのではあるが、自分自身ではまったく花を種えず、家に一本の花もなかつたかのようなのである。「尋菊記」の冒頭において「顧半畝之宮、無地可植」といい、またその末尾において「余丙舎三楹、庭無一莖草」といつているから、おそらくこれは事實であらう。普通、愛花

者といへば、決まつて自分で花を植えることをやるのに、花作りをまったくやらず、他人のものをもつぱら看てまわるだけというような愛花者は、文獻上には殆んど例をみない。この點で、彼は獨特の相貌をもつた愛花者として、特筆するに價する人物であると思われるが、われわれは彼がなぜ他の遺民たちのように「種花隱遁」せずして、このような一風變つた愛花の姿勢をとつたのかについて、その理由を探らねばならない。この頃にはもはや、舊罪を問われて逃げまどう必要はなかつたはずであるのに――。

それについて、彼はしばしば自分が極めて貧乏で、花を植えて楽しむというほどの生活状況にないからだ、といっている。つまり貧窮こそ最大の理由であるというのである。貧窮といへば、彼はたしかにこの戦亂によつて、殆んどすべてのものを失ひ、貧窮のどん底にあつたといつてよい。たとへば、順治二年（一六四五）には、二人の兄のうち、一人は揚州の戦いに死に、一人は長興の戦いに斃れ、彼だけがとり残された。また、崑山の戦いでは、二人の嫂あにょうやその子供たちが悲惨な最後をとげ、父もまもなく病死し、先祖傳來の書籍は盡く散佚してしまつた。またその時、崑山金潼里の先太僕（歸有光）の墓地の墓守も殺され、その小屋さえ人手にわたつた。ついで順治四年には、祖母の柩を假りもがりするため江村の故廬を賣りはらい、順治八年には李巷にあつた先祖以來住みなれた家が大風で倒壊し、しかも貧窮に迫られたために、ついに家屋敷を手離してしまひ、一家離散するはめにおちいつた。その後、同十二年（四三歳）のとき、城東の南門の内に卜居したようであるが、これもまた倒壊したらしく、やつと同十五年になつて、金潼里の先太僕の墓地の西偏にある墓守の住んでいた小屋を十二緡で買ひ戻し、これを「萬家基」となづけて定住することになつ

たのである。しかしその小屋は、「居瓦三楹、向明而庫小、南北丈有
二尺、東西三丈、簷高六尺、出入必俯躬、後臨河、前有庭、廣二丈
許、與鄰家共之」というだけの陋屋であり、「余今無一畝之宮、來居
於此、乃自爲守家之人耳」(萬家基記)という有様であつた。そんな貧
乏に嫌氣がさしたのか、何なのか、理由は定かではないが、彼が尋花
の旅をはじめてまもなくの順治十八年の正月には、長子の琨が、西山
に往つて童兒に訓えるという書き置きを残して、忽然と家出し、つい
に不歸の人となつた。これも歸莊にとつて深い心痛事であつたに相違
ない。このように、この戦亂によつて、多くのものを失なつた彼は、
たしかに物心両面にわたつて貧窮にあえいでいたことは間違いないよ
うである。同時代人の隨筆にも、歸莊のわびしい生活ぶりを傳えて、
「家貧甚、扉破至不可闔、椅敗至不可坐」(柳南隨筆)とか、「結廬於墟
墓之間、蕭然數椽、與孺人相酬對」(瓜臚續編)などと、それを證する
言葉が載つている。

といつても、物質的貧窮が、彼をして自ら花を植えずに、他人の花
を見てまわらしめた全ての理由ではあるまい。といふのは、單に物質
的なものだけなら、たとえ猫のひたいぐらゐの狭い土地にでも、花を
植えようと思えば、植えられぬことはないからである。それよりもむ
しろ、彼はそのような貧窮に甘んじて、「一畝の宮もない」小屋で、
みすぼらしく花を植えるという、じめじめとした、さもない生活には
耐え得ない何物かが、彼の心の、少なくとも一隅には、脈打つていた
のではあるまいか。そう思えば、思われるふしがないではない。彼は
明の文豪歸有光の子孫である。そういうプライドが彼の心の奥底に、
無意識的にせよ、ひそんでいたと考えられないことはなからう。その
彼が、家名や財産や兄弟など、昔日の榮光をことごとく戦亂の中に失

ない、敗殘の身になり果てたからといつて、それをそのまま肯定し、
貧寒きわまりない生活を送るには、餘りに自分がみじめで、よく耐え
ることができなかつたとしても不思議ではあるまい。それが彼をして
敝廬にわずかの花を植えて樂しむ、みじめな生活棄てて、むしろ一
本の花も植えずに、昂然として尋花の旅にのぼり、天下の名花をすべ
てわがものとする豪放な生き方を選ばせたのではなからうか。彼の言
葉の中に、そのことを裏付けるような記事がある。彼は「尋菊記」の
末尾のところ、貧窮者の開き直りにも似た、次のような看花哲學を
説いている。

嘗讀仲長統樂志論・庾信小園賦・白居易池上篇、皆有花果竹木之
娛、而李衛公之記平泉草木、尤爲侈麗、然以布衣之士、生當亂
離、欲求如是、殊不可得。吾則惟辦一杖一屐、舉天下之名園皆可
到、到則其中之嘉花美木、皆我有也、豈必我自育之園、自植之花
木、始足娛賞哉。即陶隱居之松、王子猷之竹、林和靖之梅、皆取
必園宅所有、似非能去物我之見者、何如余丙舍三楹、庭無一莖
草、而他人之苑囿卉木、我皆得而樂之也。

仲長統・庾信・白居易・李靖などのように、豪壯な庭園を構えて花
卉を賞でるのは、亂離に生まれた貧乏な自分にはとてもできない。し
かし逆に、自分は一杖一屐をととのえさえすれば、どこにでも行ける
身軽な人間だから、天下の名園を看てまわり、その花木をわがものと
して賞翫することができる。必らずしも自分の庭園の自ら植えた花木
のみが、心を樂しませるとは限らない。松を愛した陶弘景、竹を好ん
だ王徽之、梅を嗜んだ林逋などは、みな自分の庭園にあるものを賞玩
したのだから、なお所有の觀念にとらわれており、「能く物我のを見を
去る者に非ざるが似し」である。それに比べると、敝居に一本の花も

なく、他人の庭園の花木をわがものとして存分に享樂できる自分のほうがよほど勝ち勝っている、というのである。自然美（風月）を無所有・無盡藏のものとみて、これを觀賞するには「所有」の觀念を排棄すべきことをはじめて説いたのは蘇東坡であり、それ以來、このような思想は、物質的所有を超えた誇り高い文人の自然觀として存在してはいた。⁽⁶⁾しかし、この考え方を、自然美（風月）という萬人共有の漠然としたものではなく、特定所有者のある花に適用して、尋花の旅を實踐した者は、おそらく歸莊をおいて外にはあるまい。これこそまさに、彼が貧窮の中に創見し得た独自の看花哲學といへば、彼はこの思想に支えられて、天下の名園の花木を自己のものとして心おきなく賞翫したのである。

歸莊が陋居に自ら種花することなく、尋花の旅に狂氣じみた執念を燃した、またの理由としては、次のようなことも考えられる。彼にはもともと性格的に狷介偏奇なところがあった。彼が顧炎武と並稱されて「歸奇、顧怪」と呼ばれたことはよく知られるところであるが、彼自身も自分のことを「聖世遺民、固是双飛雁、清時棄物、久爲怪鳥窮猿」（辭提學僉事給扁揭帖）といい、「雖流俗目爲狂人、驚爲怪物」（戲擬淳于髡諸公書）といっている。また、朱彝尊の靜志居詩話には「歸復軒莊、好奇、世目爲狂生」といい、王應奎の柳南隨筆には「崑山歸玄恭先生、狂士也」といい、その他、清詩紀事初編（卷二）には、彼が何度も人を罵倒し、「晩年、僧舍に屏居し、窮いよいよ甚しくして、罵いよいよ烈し」かった様子を傳えている。このように彼は自他ともに認める狂士ではあったが、しかし眞箇の狂人ではなく、彼の狂が實は佯狂であったこと、これまた世人の知るところとなっている。「一時遂有歸痴之目、然玄恭實不痴也」（飢臆續編、「書淫墨癖、竟以佯狂

終身」（鮎鯨亭集外編）卷三「題歸復軒萬古愁曲子」というがごとくである。當時は、明末の風潮のなごりや清初の政治的壓迫などによって、佯狂玩世の處世態度をとった遺民的文人が多く、歸莊もまたその一人であるといえようが、彼の場合も狂や奇でしか生き得ないほど、もろもろの挫折や壓迫や打撃を受けていたのである。それらは、「余有無窮之恨、鬱積於中」（吳門唱和詩序）とか、「平生忠義憤激之懷、磊落雄偉之氣、結轡於中、無以發之、皆托之於酒」（戲擬淳于髡諸公書）とかいうように、量り知れないほどの悲愁憂憤となつて、彼の心のなかに鬱積したのである。このような心中の鬱屈した「無窮の恨」は、陋屋にみすばらしく花を植えるのでは晴らしがたく、「余年來梅花時、往往載酒獨遊、非鄧尉則洞庭二山……然余蘆中窮士、中懷鬱塞、不得已而寄其無聊」（題尤遠公尋梅圖）というように、結局のところ、曠然たる放浪の旅によつて發散解消する外なかつたのである。

さらにまた、彼がもともと華やかなものを好む豪放な性格をもつていたことも、「種花隱遁」を欲しなかつた理由になるかもしれない。一敗地にまみれて、今はわびしい境涯に沈淪しているが、彼もかつては「壯懷豪氣」や「投筆仗劍の志」を持ち、並々ならぬ野望を抱いていたのである。そういう性格が今のわびしい境涯において、いよいよ華やかなものへの憧れを募らせたのであろう。彼が梅や菊を賞翫したのは、それらの花が、節義と高潔の氣象をあらわしているのので、彼の氣稟と一致するもののあるのは當然であるが、それと共に、彼がしばしば牡丹の花を尋ねたことは、彼の他の一面を示すあかしのように思われる。というのは、牡丹は富貴の花であり、もともと世俗的榮耀の象徴であり、彼のような貧賤の遺民にはふさわしくないものだからである。ところが彼は、あえて富貴の花である牡丹を好んで賞翫しようとする

したのである。これについて次のようにいっている。

客曰、「周濂溪謂、牡丹、花之富貴者也。以子之貧賤、毋乃不宜。余曰、「吾貧則無儻石矣、而性慷慨、喜豪放、無貧之氣。賤爲韋布矣、而輕世肆志、不事王侯、無賤之骨。安在與花不宜。」(看牡丹詩自序)

貧賤の境涯にあつても、慷慨豪放の氣象をもち、玩世不恭、王侯に仕えない自分は、貧賤の氣骨を持たぬので、當然牡丹を賞することができるのである。また、窮儒たる自分の看花は、豪勢さでは富貴者にかなうべくもないが、意興や胸懷においては決して劣らないと、次のようにいう。

昔人稱牡丹爲富貴花、遊賞者必香車寶馬、豔姬妖童、十千沽酒、一石亦醉、乃爲宜稱。余今或徒步、或乘一葉舟、倩友人家三尺童相隨、雖所至不之酒、願病後不能多飲、窮儒看花、景象如此、然意興則不減也。且必待富貴之具而後恣其遊賞、豈可得哉。吾以爲三州縣三十餘家者、其花石樓臺之勝、服玩之珍奇、歌舞之妙麗、洵不可及矣。乃若胸懷無累、行止自由、恐未有如余者也。(看牡丹記)

これらの言葉には、むしろ世の富貴者に對する反撥、挑戰の意識さえも窺われる。彼にとつては今の世の富貴者はみな夷狄に屈し、その道を以てせずして富貴を得た者である。だから、自分は文字通り窮愁の中にあるが、自分の生き方はそのような不義にして富貴を得た者たちとは異なるのだ、彼らに敗けてたまるか、といった意識がある(筆耕説など参照)。このような心が、絢爛華麗な花を執拗に追い求めさせることになつたのであろう。そのことは「亂離時逐繁華事、貧賤人看富貴花」(東行尋牡丹、舟中作)詩という彼の詩句にもあらわれてい

歸莊における看花への執念

るようである。

以上、歸莊が一株の花をも植えずに、ひたすら他人の「花」を求めて彷徨した理由をいくつか挙げた。かくして彼は、満たされぬ節義の心を癒したり、敗殘者としての鬱情を慰めたりしたのである。

明末以後、小品文學の盛行に伴つて、遊記文學も隆盛をきわめ、おびただしい作品が生まれたが、その中に、各地の花園や花の名所を尋ねて作つた、看花・尋花の遊記がある。たとえば、陳繼儒「遊桃花記」、王衡「東門看桃花記」、袁宏道「張園看牡丹記」、夏基「西溪尋梅記」、馮夢禎「西山看梅記」のような作品がそれである。看花・尋花の遊記が、明末以後における花の文化の高潮に伴つて、數多く作られたということは興味ぶかい文學現象であるが、それはともかくとして、歸莊が尋花の旅のみを以て能事畢れりとせず、その紀行文を書くことを思い立つたのも、やはりこのような文學的流行があつたからであろう。しかし、それら明末以後の諸家の作品が殆んど單發的な短篇の遊記であり、しかも多く平板で形式的な描寫に止まつているのに對して、彼の尋花日記が長文の連作であるのは、彼自身の中に沸き起こるもろもろの衝動が、人に倍して強かつたせいかもしれない。

六

さてこれまで主として尋花日記を通して、彼の人生と花とのかかわりを見てきたが、さきに述べたように、彼にはなお「看花雜詠」一卷と「落花詩」十六首という詠花詩がある。「看花雜詠」は全部で八、九十首ばかりの詩を収めており、その中には時おり、彼の看花に對する情熱を吐露した作品などもみられるが、その多くは尋花の旅の途中に作られたもので、斷片的な詠花詩の集積といった印象を免がれた

い。そこで、「看花雜詠」についてはひとまず置き、ここではその類の作品中でも、いささか特異な意味をもつ彼の「落花詩」を取り上げ、それがどのような意圖で作られたのか、また彼の作品中、どのような意味をもつのか、といったことについて、少しく考えてみたいと思う。それなくしては、歸莊の花に對する複雑微妙な心事の全貌を理解するには、いささか事缺くと思われるからである。

彼の落花詩は、最初が十二首、後が四首の連作で、合計わずかに十六首あるにすぎないが、それにもかかわらず、この詩には當時の有名な文人たち——吳梅村・宋荔裳・孫永祚などによる賞贊にみちた評語が付け加えられている。彼はまず、その序において、それまでの落花詩のおおまかな流れを述べて、次のようにいう。

落花之詠、昔稱二宋、至成弘之際、沈石田先生有落花詩三十首、同時呂太常・文待詔・徐迪功・唐解元皆有和作、率以十計。其後申相國・林山人輩、唱和動數十篇、亦已窮態極致、競美爭奇、後有作者、殆難措手。然諸公皆生盛時、推激風雅、鼓吹休明、落花雖復衰殘之景、題詠多作穠麗之辭、即有感歎、不過風塵之況、憔悴之色而已。

歸莊のいうところを一言でいえば、彼以前にも落花詩は多いが、それらはみな濃艶華麗なものであった。それは、作者がみな泰平の世に生まれ、「即ち感歎ありとも、風塵の況、憔悴の色」を詠うにすぎないからである、ということになる。彼はこのように、彼以前の落花詩は、おおまかにいって、普通の感傷的な抒情詩であると規定したあと、自分の落花詩は、それまでのものとはやや異なった情調を持っていると、次のようにいう。

我生不辰、遭值多故、客非荆土、常動華實蔽野之思、身在江南、

仍有大樹飄零之感。以至風木痛絕、華萼悲深、階下芝蘭、亦無遺種。一片初飛、有時濺淚、千林如掃、無限傷懷。是以摹寫風情、刻畫容態、前人詣極、嗣響爲難。至於情感所寄、亦非諸公所有。無心學步、敢曰齊驅、借是抒情、情盡則止。

自分の落花詩は、單なる美的な感傷詩ではなく、「限りなく懐を傷ましめて」作ったものであるから、「情感の寄する所に至っても、亦た諸公の有する所に非ず」というのである。そのことは孫永祚も跋文で、「古今詠落花者、動盈卷軸、亦既盡態極妍矣。元公（歸莊）別有標置。與會所寄、憔悴婉篤、雖衛洗馬之言愁、江文通之賦恨、殆不是過」と認めているように、たしかに彼の落花詩には、どれを取ってみても、愁恨にみちた情緒がただよっている。けだしそれは、彼自身や他の評者たちも婉曲に述べるところ、亡國という無限の傷懷を傾けて詠っているからであろう。ここにも形式は異なっても、「尋花日記」に通ずるものが流れているといつてよいだろう。そのうちの一首を引用してみよう。

萬樹穠華無復存 飄零失所不須論
空中何處求遺種 散後無緣更庇根
珮玦臨江愁帝子 珊瑚滿路泣王孫
騷人羈客關情切 觸目凄然有淚痕

彼の落花詩には、どれを引いてもこのように暗々のうちに明朝の滅亡のことが寓されている。花とは彼にとっては明朝であり、落花とはその滅亡に外ならなかったのである。このように落花に王朝の滅亡を寄托した點で、彼の作品は、それまでの落花詩の流れの中では、特異な存在となつていふと思う。とは言つても、落花に明朝の滅亡を寄托するのは、その頃必ずしも彼のみのことではなく、清初の民族主義

的詩人には、まま見られることである。特に有名なのは、王夫之（船山）であるが、奇しくも歸莊の「尋花日記」と同様、彼は順治十七年（二六〇）冬より翌年にかけて、落花詩十首・續三十首・廣三十首・寄詠十首・禪體十首・補九首の計九十九首を作っている。これはまぎれもなく、亡國の悲憤を落花に托したものである。亡國の民の心はみな一つだったのであろう。

歸莊の落花詩がいつごろ作られたものか、残念ながらそれははっきりとはわからない。しかし、明朝が滅亡し、復明の希みもはや完全に絶たれたと、彼が判断したところであることは間違いないであろう。あえて想像を逞しくするならば、落花詩もやはり彼が尋花の旅をはじめたのと同じころ、すなわち順治末年のころではなかったかとも思われる。というのは、王夫之の「落花詩」もそのころ作られており、多くの民族主義者がこのころには、もはや大勢の如何ともしがたいことを悟り、亡國の思いに沈んでいたからである。

以上見てきたように、歸莊における「花」は、一言でこれをいえば、かがやかしい明朝の象徴であり、「落花」は、かなしい滅亡の象徴だったのである。「尋花日記」は、その失われた輝かしい過去の夢への充たされぬ憤懣の燼（くすぶり）であり、「落花詩」は、散りゆく花にもはや爲すすべもなき盛者必衰の理を觀て、その燼烟をしずめんとする鎮魂の調べであったと思われるのである。そしてそれらは、歸莊と同じ運命に生きる亡國の遺臣たちの複雑な思いを代辯する哀しい詩文であると考えられることのできるのではあるまいか。

注(1) 陳少棠「晚明小品論析」（一九八一、臺灣波文書局刊）の第三章丁日
記および付録「晚明小品作家一覽表」参照。

歸莊における看花への執念

(2) 「歸莊集」（一九六二、上海中華書局刊）の「出版說明」。

(3) 「避亂投浮佛寺、寺僧觀公、余族兄也、故往依之」詩。

(4) 清水茂氏「顧炎武集」（朝日新聞社刊）参照。

(5) 拙稿「明清時代における愛花者の系譜」（九大教養部「文學論輯」第二八號）。

(6) 拙稿「蘇東坡の自然觀」（目加田誠博士古稀記念「中國文學論集」参照）。

(7) 落花詩は、「看花」、「惜花」などと並んで、時おり用いられる詠花題として昔から存在するが、古くは宋初の宋庠宋祁の兄弟が、落花詩の作者として知られ、茗溪漁隱叢話後集卷二十、詩人玉屑卷七、青箱雜記、庚溪詩話卷下などの宋代の諸書に引かれている。しかし、明代中期までは、格別とりたてて言うこともない平凡な詩題にすぎなかった。ところが、明代中期に沈石田の「落花三十首」が出ると、當時の文人でこれに和する者がひきもきらず現われて、突如として落花詩は、中國の詠花詩中において、詠梅詩と並ぶくらいの最もポピュラーな詩題として大流行しはじめたのである。これについては、歸莊のこの記事だけでなく、明末の「漱石閒談」にも「吳中落花詩、自沈石田一咏三十律、一時唱和紛然、至有東坡儔辛之謂」（揮塵詩話にも同文あり）といっていることからも分る。たしかに「落花詩」は、沈周一派の著名な文人たち、文徵明・唐寅・徐禎卿・呂敬などが、彼の作品に唱和し、詩軸畫冊にこれを描いたために、非常に有名になり、俄然盛行しはじめたようである。「古今圖書集成」（花部藝文三）を見れば、沈周の詩に和した者は、右の詩人の外に、唐時昇・楊毅・羅燾・王建極がおり、その和詩がそれぞれ幾首ずつか挙げられている。また、江兆申の「關於唐寅的研究」や「文徵明與蘇州畫壇」（臺灣故宮博物院刊）によれば、それは大體、弘治四、五年（一五〇四、五）のことであるという。落花詩盛行に關するこの間の事情については、別稿で改めて論ずる機会があると思うが、とにかく

沈周をはじめとする人々の文壇的聲名と、愛花の風潮の勃興とによって、落花詩は彼以後、驚くべき流行をみた。

その後の落花詩の作者（歸莊以前）の例をいくつか挙げると、たとえば虞淳熙・淳貞兄弟は、「落花詩、海内作者、無論數十家、而虞德園先生伯仲爲最」（費元祿「轉情集」卷下）といわれるだけあって、一夜にして「溪上落花詩」を一百五十首も賦し、それを「填篋音」二巻に収めている（四庫提要）。これについては、袁宏道の「西湖紀述」中にも一文があり、また湯顯祖にも「溪上落花詩題詞」がある。また、明末の徐應秋の「玉芝堂談薈」（卷八「落花詩」）によれば、申時行は落花詩三十首を作り、林若憺はこれに和する詩を六十首作ったという。申時行は、歸莊のいう申相國であり、林若憺は林山人に當る。「玉芝堂談薈」にはまた、落花詩の作者としてその外に、馬破叔・董叔允・于文若・魏君屏・邵肇復・徐與公・丘文學・余襄公などの名前や、馬浩瀾の詞があがっている。さらに、明末の作者として管見の及ぶところでは、王季重は、戴大圓が寄せてきた落花詩六十首に對して、「落花詩序」を作っており、鄧漢の「留夷館集」には「落花詩三十首」があり、同じく明末の陳禋永の「水鏡集」にも「落花三十章」があり、李維楨の「大泌山房集」にも沈相如の落花三十首や吳仁伯の落花三十首に對する序文が見える。また、千頃堂書目には、許仲譽「落花詩」（萬曆辛卯十九年）・朱之蕃「落花詩」一卷（萬曆乙未二三年）・陳操「落花詩集」一卷（總集類、詩）などの落花詩集がみえる。また、詩ばかりでなく、落花の賦も流行したようで、たとえば葉憲祖（一五五六～一六四一）の「落花賦序」には、「武林張次公、嘗有落花賦、贈炙人口」（明文授讀）といっている。これは私の知見の及んだ限りであるが、もしたねんに調べるならば、それこそ枚擧にいとまがないであろう。

なお、歸莊については、藤井良雄氏に「歸莊の落花詩」（九大文學部、

「文學研究」第七九輯）という論文がある。参照されたい。